様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０６９８

研究課題名（和文）外国語としての英語ライティング力の発達：多角的分析に基づく言語的特徴の解明

研究課題名（英文）Assessing the development of foreign language writing skills: Multidimensional analysis of lexicogrammatical features

研究代表者
保田　幸子（Yasuda, Sachiko）

神戸大学・大学教育推進機構・准教授

研究者番号：６０３８６７０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，日本人英語学習者のライティング能力を説明する言語的特徴を明らかにすることを目的に実施された．調査の結果，学習者のライティング能力を説明する言語的特徴として，ジャンルの違いを受けないものと受けるものがあることが示唆された．「語彙多様性」は，ジャンルの違いに関係なく，読み手の評価に影響を与えうる要因であることが明らかにされた．一方で，メール文では，「文の複雑性」が高いほど読み手の評価が上がり，要約文では，「語彙密度」が上がるほど読み手の評価が上がる傾向があることが明らかになった．

研究成果の概要（英文）：This study has attempted to investigate how Japanese EFL learners develop their linguistic knowledge as well as their writing abilities as they engage in one-year genre-based courses. The course focused on two types of genres: emails and summaries. The results showed that students were more likely to use diverse lexical resources in two pieces of writing at the end of the course, which had a positive impact on the reader. On the other hand, the quality of students' writing and their language choices was affected by genre differences. While syntactically more complex texts (i.e., lexically less dense texts) were highly evaluated by the reader in emails, lexically more dense texts texts (i.e., syntactically less complex texts) were highly evaluated by the reader in summaries. The results imply that, as Norris and Ortega (2009) noted, it would be advisable to employ measurement practices that engage with the construct reality of multidimensionality.

研究分野：Second Language Writing

キーワード：外国語教育　第二言語ライティング　ジャンル　アカデミックリテラシー　タスク

１．研究開始当初の背景

学習者の英語ライティング能力は，「総合的評価 (holistic scoring)」に基づいてなされることが多い（例：TOEFL-iBT や IELTS のライティングテスト，教員による A, B, C 等の判定等）．しかし，この総合的評価は，具体的に「ライティングにおいて何ができること」を意味しているのだろか？あるいは，これらの総合的評価は，ライティングのどの部分を測定した結果なのだろうか？例えば，TOEFL ライティングテストのスコアが６点と３点の英文では，「文章の複雑さ」と「語彙の洗練さ」にどのような違いがあるのか？文と文の「結束性」や全体の「一貫性」にどのような違いがあるのか？このように，ライティングテストの「総合的評価」だけでは，学習者の文章力と言語力についての詳細を知ることは不可能である．

本研究は，こうした「総合的評価」に寄与する「言語的特徴」は何かを解明し，得られた知見を、英語ライティング指導法，教材開発に生かすとともに，近年，第二言語ライティング研究で実証研究の必要性が指摘されている「言語力 (linguistic proficiency)」と「書く力 (writing proficiency)」の双方向発達 (Manchon, 2009, 2011)についての研究の発展に生かすことを目指して実施された．

２．研究の目的

英語ライティングの総合的評価は，TOEFL や IELTS 等のライティングテストの自動採点システムとして幅広く使用されているが，そこでは，主に，総語数，語種数，センテンス数，センテンスあたりの平均語数など，表面的特徴が説明変数となっている．しかし，こうした表面的・形式的な語彙特徴に基づく総合的評価だけでは，英文の評価として限界があるのも事実である．なぜなら，文章とは，書き手が読み手に向けて特定の内容を発信する社会的行動であり，表面的・形式的な面のみならず，テキスト全体の「わかりやすさ(readability)」，文と文の「結束性(cohesion)」，内容の「一貫性(coherence)」といった談話レベルの指標も英文の質に寄与しているからである．すなわち，これらの談話構造を産出するために，学習者はどのように語彙を選択・使用しているのか，多角的な視点から詳細な分析を行う必要がある．

そこで，本研究では，次の五つの指標に焦点を当て，どの指標が読み手の総合的評価の決め手となるかを明らかにすることを目標とした．①語彙多様性，②語彙密度（内容語の割合）③語彙洗練性（語の難易度），④文の複雑性（従属節の割合）⑤文法メタファー (Grammatical Metaphor)である．

リサーチクエスチョンは，下記の二つである．

(1) どのような言語的特徴が，外国語としての英語ライティング力の発達指標として有効であるか．
(2) 習熟度の異なる学習者が産出する英文には，言語的特徴においてどのような違いがあるか．

３．研究の方法

研究参加者は，大学の必修英語コースを履修する日本人大学生 1 年生（N=60）である．これらの学生は，TOEFL-ITP スコアに基づき習熟度別に 2 グループに分けられた．

データ収集は一年間にわたって実施された．学習者は，前期の開始時（4 月）と終了時 （8 月）に「E メール文」のタスクに取り組み，後期の開始時（10 月）と終了時（2 月）には「要約文」のタスクに取り組んだ．

英語ライティング能力の発達指標を知るために（→リサーチクエスチョン 1)，各授業の開始時と終了時の英文を比較し，言語的特徴に変化があったかどうかを量的・質的双方の観点から分析した．また，習熟度による違いを知るために（→リサーチクエスチョン 2)，各授業の開始時と終了時の英文の言語的特徴をグループ間で比較した．

各指標の評価は Coh-Metrix を用いて数値化された．E メールと要約文の総合的評価は，二人のレイターの平均点を採用した（レイターの評価の差が 3 点以上開いた場合は，第三者が介入することとした)．

４．研究成果

ジャンルの違いに関わらず読み手の総合的評価に寄与する指標として「語彙多様性」（＝一つのテクスト内でいかに異なり語を多く使うか）が一つの鍵になることが明らかになった．

一方で，ジャンルの違いに影響を受ける言語的特徴があることも明らかになった．例えば，E メールのような口語と文語の両方の特徴を持つジャンル（blurred genre）では，上級の学習者ほど，従属節を含む複雑な文章を用いる傾向があることが分かった．

E メール文における依頼文

上級者の言語的特徴 - **I wonder if it would be possible** for you to meet me on Friday, 10 September at our exhibition. - **I'd appreciate it if you could** call me within the next few days.
初級者の言語的特徴

- I want you to consider this request.
- Would you email me as soon as possible?

一方，要約文などの学術的ジャンル（academic genre）では，上級の学習者ほど，節を名詞句に直すことで文法メタファーを使用し，抽象度をコントロールしながら，文と文の結束制を高める工夫をしていることが明らかになった．

要約文における文法メタファーの例１

オリジナルの文 We can use our knowledge to take vegetables and grow larger ones which have more nutrition and better flavor. In other words, we can improve on nature.
学習者の要約文 ***The effective use of plant genetics*** *brings us* ***more varieties of vegetables in size, nutrition, and flavor****.*

本研究の結果が示唆する重要な点は，「英語ライティング能力」を評価する際は，「ジャンルの違い」を考慮に入れる必要があるということである．すなわち，特定の状況において読み手によって期待される言語的特徴は，どのような文章をどのような目的で書くかによって変動するダイナミックなものであるということである．したがって，英語エッセイライティングの評価ために開発されたルーブリックをそのままＥメール文や要約文に使用することは，評価の妥当性の観点から好ましくないということになる．

また，本研究が示唆するもう一つの重要な点は，英語ライティング能力の測定においてしばしば用いられる complexity（複雑性）という指標の解釈である．本研究では，口語に近いＥメールのようなジャンルでは，従属節を含む複雑な文が読み手によって好まれたが，一方で，要約文のような学術的なジャンルでは，従属節を名詞化した文法メタファーを含む文章が好まれる傾向が見られた．つまり，complexity が何を意味するかはジャンルによって変わるということになる．

これらの結果は，今後，英語学習者のライティング能力を評価する際に評価者が考慮しなければならない重要な視点の一つであると言える．また，高等学校や大学における英語教育現場においても，教師は，書く目的や状況に応じた語彙の使い方，文章構成方法についてより具体的な指導ができるようになり，本研究から得られる成果が貴重な教育的データとなることが期待できる．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

①Yasuda, S. (in press). Towards a framework for linking linguistic knowledge and writing expertise: The interplay between SFL-based genre pedagogy and task-based language teaching. *TESOL Quarterly*.（査読有）

② 保田幸子・王沁雪 (2016).「学習者はフィードバックをどのように利用しているか．—学習者意識と作文推敲過程の事例調査を通して—」『海外日本語教育研究』第 3 巻, 49-71.（査読有）

③ Yasuda, S. (2016). Systemic functional linguistic approaches to second language acquisition: Developing language and writing skills through genre-based tasks. *Proceedings of JASFL, 10*, 25-36.（査読有）

④ Yasuda, S. (2015). Exploring changes in FL writers' meaning-making choices in summary writing. *Journal of Second Language Writing, 27,* 105-121.（査読有）

⑤ Yasuda, S. (2015). An overview of the university English curriculum: A conceptual framework for curriculum innovation. *Bulletin of KIKAN Education, 1*, 102-117.（査読有）

⑥ Yasuda, S. (2014). EFL writing in Japanese instructional contexts: Present perspectives and future directives. *Asian EFL Journal, 16*, 150-187.（査読有）

〔学会発表〕（計　6　件）

① Yasuda, S. (2017). Writing in a foreign language in CLIL contexts: Subject knowledge and biliteracy development. American Association of Applied Linguistics (AAAL), Portland, OR, USA, March 21, 2017.

② 保田幸子（2016）．英語学術論文作成のための自律学習支援：ESP 分野別コーパスに基づく言語的特徴の分析と学習．学術英語学会研究大会．東京医科大学．2017 年 6 月 26 日．

③ Yasuda, S. (2015). Systemic functional approach to EFL writers' meaning-making ability. Applied Linguistics Association of Australia (ALAA). University of South Australia, Adelaid. December 1, 2015.

④ Yasuda, S. (2015). EFL writing instruction in East Asia: Policy, practice, and future directions. The 2nd International Symposium on EFL Writing in East Asia. The University of Tokyo. October 31, 2015.

⑤ Yasuda, S. (2015). Systemic functional approaches to second language acquisition: Toward a reconceptualization of written language development. Japan Association of Systemic Functional Linguistics. Tamagawa University. December 11, 2015.

⑥ Yasuda, S. (2015). Issues and challenges in teaching and learning EFL writing: A cross-national survey. American Association of Applied Linguistics. Toronto, Canada. March 21, 2015.

６．研究組織

(1)研究代表者

保田　幸子（YASUDA, Sachiko）
神戸大学・大学教育推進機構・国際コミュニケーションセンター・准教授
研究者番号：60386703

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)